越境文学研究とドイツ語圏越境文学

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
土屋勝彦（つちや・まさひこ）

越境文学研究の意義

境界を踏み越える文学は、旅や移動、探検、移民、亡命、巡礼といった空間的移動ばかりではなく、ポストモダンやポストコロニアルな条件の下で成立する混交・交雑ないしはハイブリッドな経験をも包含する。越境する文学は、それらを、文化や、個々の意識のインターアクティヴな過程として描出し、越境的コスモポリタンな存在としての論理の創造を目指している。それはまた、ナショナリティや人種、ジェンダー、世代の境界を越え出ようとする社会批判的なメッセージをも内包する。

母語以外の言語で創作する作家と言えば、フランス語ならルーマニア出身のシオラン、アイルランド出身のベケット、チェコ出身のクンデラやアゴタ・クリストフなど、英語ではロシア出身のナボコフ、ポーランド出身のコンラッド、トリニダード・トバコ出身のナイポール、インド出身のラシュディなどが思い浮かぶ。実際、英語圏におけるネイティヴ・アメリカン系作家やカリブ系作家、ヒスパニック系作家、日系やアジア系作家、ロシア語圏におけるナボコフやブロツキーなどの亡命作家たち、ドイツ語圏におけるエツダマーなどのトルコ人作家たち、あるいは日本人ドイツ語作家多和田葉子、日本語圏におけるリービ英雄やデビッド・ゾペティ、アーサー・ビナードなど、欧米出身の日本語作家など多種多様な作家たちが輩出してきた。彼らは母語でない言語による作品を創造し、居住国のナショナリズムないしは主流文化に安住できず、それを異文化の視線から批判的にとらえ相対化しようとする。異文化と衝突・融合するなかで、ナショナリズムを越え、自文化をも絶対視しない複眼的思考と複層的な言語感覚を有する。彼らの作品に現われた越境の実相を解明し、その歴史的社会的背景にあるものを明らかにし、境界を踏み越えることの現代的な意義を解明することは重要な現代的課題のひとつである。

カリブ海や南米の文学を中心とするクレオール文学研究を踏まえながら、さらに日・英・独言語文化圏における現代越境作家たちに焦点を当て、トランスカルチュラルな経験の実相を横断的に考察し、同時代の越境者たちがどのような背景を持って登場し、文化活動を行ってきたのかを個々のケーススタディとして実証的に研究することは、閉じた体系としての規範的な各国民文学を相対化する視点を付与するとともに、資本主義システムの平準化に通底する世界的グローバリゼーションの傾向に対抗する社会文化的な批判の言説を探ることにもなろう。とくに、ナショナルな言語観を打破するために、身体性を強調し、ボーダー文化のダイナミズムと異境性を獲得する作家たちのポストモダン的な姿勢に着目したい。そして彼らのあり方と現在の多くの移民が置かれている状況の関連性を検証し、世界文学の潮流を各国民文学の領域を超えた視座から再考することは、最近の、とりわけフランス語圏におけるポストコロニアリズム的な諸研究や多言語文化主義ともつながる問題である。

第1部 越境の文学

ドイツ語圏の越境文学について

「越境文学(transnationale Literatur)」の定義についてドイツ語圏では、一九七〇年代の差別的なニュアンスを持つ「外国人労働者文学(Gastarbeiterliteratur)」に始まり、「外国人文学(Ausländer-)」「客人文学(Gast-)」「異邦者の文学(Literatur der Fremde)」「少数者文学(Minderheitenliteratur)」を経て、現在では中立的な呼称である「移住者文学Migranten-」「移民文学Immigranten-」「国外移住(亡命)文学Emigrations-」「移住文学(Migrations-)」などと表記されている。とりわけ七〇年代には、「間文化的文学(interkulturelle Literatur)」「多文化的文学(multikulturelle-, mehrkulturelle-)」など理想主義的な呼称を付与されながら、実際には、いわば「真のドイツ文学」の外側に立つ文学、「周縁文学(Peripherie-Literatur)」あるいは「エクゾチズム文学(Exozismus-Literatur)」として、「ドイツ国民文学」の本流から外れた周辺文学ないしは傍流文学に甘んじてきた。

「母語以外の言語で執筆する創作者」という限定された定義による越境作家についての研究は、ドイツ語圏でも最近注目されつつある分野となっているが、いまだ確固とした文学研究の一角を占めるまでには至っていない。しかしいわゆる「ドイツ国民文学」に対して、彼らの文学的営為が有効な文学様式的衝撃ないし革新となり、一定の文学史的貢献をなしえるのかどうか、異文化の視座から描出された独自の世界像をドイツ文学界に提示しえているのかどうか、その新たな表現法や言語感覚によってドイツ語圏文学の規範を打破し更新しうるのかどうか、今後その諸作品の具体的な考察を通して検討していく必要があろう。

非ドイツ語圏の出身者でありながら、現在ドイツ語で創作する越境作家ないしは移民作家たちに対して与えられる賞が、アーデルベルト・フォン・シャミッソー賞である。一九世紀初頭に活躍したロマン派小説家のシャミッソー自身、フランスとドイツの間にアイデンティティを引き裂かれた作家だった。これはボッシュ(Robert Bosch)基金をもとに一九八五年から始められ、毎年シャミッソー賞と奨励賞、ときには栄誉賞が贈られている。第一回受賞者は、シリア人作家シャーミ(Rafik Schami)であった。彼は一九四六年シリアの首都ダマスカスにキリスト教アラム人の少数民族として生まれ、一九歳で文学活動を開始し壁新聞を創刊したが出版禁止になり、二五歳でドイツに移住しハイデルベルク大学で化学の博士号を取得した後、様々の職業を転々としながら、様々の新聞雑誌に多くのテクストを発表し続けた。初めはアラビア語で、三一歳からはドイツ語でも著作し始める。八〇年代から現在まで三〇冊以上の作品を出版しており、ドイツ語圏文学界においても著名な作家のひとりである。故郷ダマスカスの口承文芸の伝統を使いながら、ドイツ人にとってエキゾチズムに響くオリエンタルな生活感情と思想の世界、さらには異邦人の視点から第二の故郷たるドイツを巧みに物語っている。

一連のシャミッソー賞受賞者たちを見ると、ロシア人のNatascha Wodinをはじめ、Vladimir Vertlib、イスラエル(ヘブライ語)人のElazar Benyoetz、モンゴル人のGalsan Tschinag、トルコ人のAras Ören, Yüksel Pazarkaya, Selim Özdogan, Emine Sevgi Özdamar, Feridun Zaimoglu, Zehra Cirak、イラン人のSaid、シリア人のAdel Karasoli、ハンガリー人のGyörgy Dalos, Terézia Mora、ポーランド人のRadek Knapp、チェコ人のLibuse Monikova、旧ユーゴスラヴィア人のMarica Bodrozic、ブルガリア人のDimitré Dinev、ルーマニア人のCatalin Dorian Florescu、スロヴァキア人のIlma Rakusa、日本の多和田葉子な

ど多士済々の作家たちが並んでいる(別表参照)。無論その出自と来歴は多種多様であり、母語とドイツ語の言語能力に強弱があるにせよ、複数文化を体現する「移民作家」であることは間違いない。

こうしたドイツ語圏越境作家の根底にある諸問題は、ウィーンの言語実験派詩人ヤンドゥル(Ernst Jandl)の「言語遊戯」や「言語不信」の観点とつながっており、それぞれの越境作家たちに内在する「異質なるもの」「異化されたもの」「不確かなもの」という不連続な文化意識による「還元された」ミニマムな詩的言語と通底している。「言語秩序への権力ないし警察」に対抗する作家たちは、自らの言語的文化的「不確かさ」を武器に「正当なるドイツ語」に反旗を翻す。多和田葉子やヤンドゥルの作品を分析すれば、「欠陥のある言語」や「ガストアルバイター(外国人労働者)・ドイツ語」を様々の方法で文学テクストに適用し駆使する過程が、規範としてのドイツ語・ドイツ文学への対抗的言語使用に転化しうることが明らかとなる。また、言語的錯誤を文学に適用し、創造的なポテンシャルを高める方法は、すでに二〇世紀初頭の文学的前衛運動(ダダイズム、シュルレアリスム、表現主義)に見られ、そこにはドキュメント的な意図と言語遊戯的な志向が含まれている。例えばトルコ人作家エツダマーの小説では、様々の「異質性」が交錯し並存する複層的状況が提示されていることが看取できる。すなわち、現代の越境者たちのアウトサイダー的な立場は、決して硬直した否定的な契機を体現するものではなく、ディスクールの絶えざる変転と変質にさらされており、それはとくに、彼らが使用しているメジャー言語であるドイツ語・文化に同化しようとしている作家たちに当てはまる現象となっている。したがってその文学活動は、メジャー文化(ドイツ文化)とマイナー文化(出身国文化)の硬直した対立を強化するものではなく、むしろ両者は相互に影響し合っていると考えられる。

ドイツ語というメジャー言語を選び取った作家たちは、移住したドイツ語圏の国々に半ば以上同化しながらも、決して母語や自文化のエトスを殺ぎ落とすことなく、むしろその異質な心眼ないし視角に映るドイツ語圏の現代社会や文化的問題と葛藤し、それを相対化し異化している。言い換えれば、複数文化の中間地帯から文学言語を紡ぎだす過程の中で、国家や国民といった固定的な領土性から逃れ越え出ていく文化的境界侵犯者を体現しているのである。母語を保持し続け、真剣な社会的苦悩を漂わせた政治的亡命文学者たちとは異なり、現代の越境的な移民文学者たちは、複数の文化を往還しつつ、それぞれの文化的制度的規範を皮肉やユーモア、諧謔によって異化し揺り動かそうとする。そのとき「ガストアルバイター言語」は、前衛詩人のテクストと同様に、制限され還元された言語として、文学創出の一手法として巧妙に加工されたミニマム言語に転化する。他方それはまた、現代の若者言葉、底辺社会層言語、ジャーナリズム言語、英語なまりの言語、アングラ言語と混交し、ハイブリッドな文学言語が跋扈する実験的磁場を創出する。とりわけ後者の新世代の若い作家たちは、越境文学という概念を越えてポストコロニアルないしポストモダンの脱領域性とマルチカルチャリズムを体現している。こうして「異質なるもの」の表現者は、母語と獲得言語の狭間に揺らぎながら、新たなドイツ語圏文学創造の確かな一歩を踏み出し始めたと言えよう。

ただし、植民地を有するフランスではクンデラやクリステヴァのような移住者の文学者たちを受け入れる素地、クレオール的なるものを受容する伝統が従来からあるが、ドイツの場合、「国民文学」の正統的、高踏

第1部 越境の文学

的な文学伝統が根強く残存しており、クレオール的な言語的変容とアングラ文化を受容するには、いまだに規範性と抵抗感が根強いように思われる。

最後にドイツ語圏越境文学の変遷を示す典型的な例として、五名のトルコ系作家たちを素描しておきたい。（後半の三名は筆者がインタヴューを行った作家たちである。）

まず七〇年代のアラス・エレン Aras Ören は、ドキュメンタリー小説を中心とする活動で知られる。労働条件の改善に向けた労働者運動として、政治的な視点から外国人労働者の状況を描いている。人種主義的差別と搾取、異質性、アイデンティティ喪失、言語喪失、エクゾチズムを主題として、出身国のトルコ文化を紹介し、西側ドイツ（ベルリン）社会の暗部（競争社会や個人主義）と対峙する牧歌的異郷的な雰囲気を称揚する。

八〇年代のアイゼル・エツァキン Aysel Özakin は、順々にトルコ語、ドイツ語、英語で執筆した稀有なインテリ女性作家である。小説に登場するトルコ人女性主人公は、様々な出身のドイツ人や外国人とエクゾチズムとして対峙するのではなく、個性ある対等の人物として、固定観念を持たぬ形で描かれる。舞台もスイス、USA、カナダ、ドイツ、トルコと多彩であり、トルコ人文学ではなく、普遍的フェミニズム文学として受容された。言語はオーソドックスな文体である。

九〇年代のエミーネ・エツダマー Emine Sevgi Özdamar は、湧き上がる感情表現やよそ者としての疎外感を、新たな言語感覚で構築しつつ、トルコ語・文化のエトス（ことわざ、言い回し）をドイツ語に移し変え、新たなドイツ語表現を探求する。自伝的な小説だが、二つの文化の衝突を描くインターカルチュラリティの文学表現の一例として読むことができる優れた作家である。

ツェーラ・ツィラク Zehra Cirak は、女性詩人という期待の地平から距離をとって、新たな女性解放の形式を詩形式のうちに言語化しようとする。彼女の三詩集は、いずれも保守的なトルコ人家庭の伝統や束縛から逃れ自立した存在者としての自己意識が強い作風であり、逃走や飛行の多層的イメージを身体性のメタファーを使って強化している。自己疎外や分裂した現実感覚という狼狽の経験を媒介するものとしての身体が主題化され、言語遊戯と不条理な新造語を使う言語変革への意思が明示される。

フェリドゥン・ツァイモグル Feridun Zaimoglu は、旧世代のように故郷文化や母語の喪失を嘆くのではなく、日常的な罵倒のジャルゴン言語 Kanake「トルコ野郎」を進んで受け入れる新世代の旗手である。「めそめそしながら媚びるような外国人労働者文学」に決別を告げ、「トルコ野郎」の攻撃的なディスクールが極右スキンヘッドに相似するラディカリズムを表現する。話し言葉のドキュメントとして、ベルリンの裏町ジャルゴンの渦巻く世界を描き、ブラックユーモア、ジョーク、皮肉、コミカル性を有するオーセンティックな世界が描出されている。

こうしたトルコ系作家たちの活動はドイツ語圏越境文学の大きな一角を占めており、彼らの文学言語は規範としての「ドイツ国民文学」や「ドイツ文学界」を革新し変貌させる潜在的な起爆力を有している。そして同時代のポストモダン作家たちとの連携によってドイツ語文学表現の新たな開拓とドイツ社会への批判的視座獲得に向かうそのパトスの行方と強度を観察する必要がある。また、「母語以外で執筆する作家」という狭い越境文学の定義を離れ、優れた文学とは本来越境的な経験を踏まえているという認識に立てば、考察対象となる越境作家たちの対象範囲は広がり、文化的多層性を体現する新旧の作家たちが視界に入ってくる。そうした既存の作家例として、カフカ Franz Kafka、カネッティ Elias Canetti、

ベッカーJurek Beckerなどを先駆者として挙げることができるが、彼らの越境性についてはまた別の機会に譲りたい。

＊小稿は科学研究費補助金基盤研究B「越境する文学の総合的研究」（平成一七～一九年度）の成果の一部である。

別表：

主要なドイツ語圏越境作家一覧：

トルコ人：Aras Ören（一九三九年イスタンブール生まれ、六九年西ベルリン移住）, Yüksel Pazarkaya（一九四〇年イズミール生まれ、五八年ドイツ移住）, Aysel Özakin（一九四六年生まれ、トルコで二つの文学賞を受賞後、八一年にドイツ移住、九〇年以降イギリスへ移住）, Emine Sevgi Özdamar（一九四六年マラチャ生まれ、六五年ドイツ移住）, Zehra Cirak（一九六〇年イスタンブール生まれ、六三年ドイツ移住）, Feridun Zaimoglu（一九六四年ボル生まれ、六五年ドイツ移住）, Selim Özdogan（一九七一年ケルン生まれだがバイリンガルで育つ）

ロシア人：Natascha Wodin（一九四五年ロシア・ウクライナ移住者としてドイツに生まれたが母語はロシア語）、Vladimir Vertlib（一九六六年レニングラード生まれ、七一年家族とともにイスラエル、オランダ、USA、イタリアを経て、八一年オーストリアに移住）、Wladimir Kaminer（モスクワ生まれ、九〇年ベルリン移住）

イスラエル（ヘブライ語）**人**：Elazar Benyoëtz（一九三七年オーストリア生まれ、イスラエル在住）

モンゴル人：Galsan Tschinag（一九四四年西モンゴル地方生まれ、六二年ドイツ移住）

イラン人：Said（一九四七年テヘラン生まれ、六五年ドイツ移住）

シリア人：Rafik Schami（一九四六年ダマスカス生まれ、七一年ドイツ移住）、Adel Karasoli（一九三六年ダマスカス生まれ、五九年ドイツ移住）

ハンガリー人：György Dalos, Terézia Mora（一九七一年ショプロン生まれ、九〇年ベルリン移住）Zsuzsanna Gahse（一九四六年ブダペスト生まれ、五六年ウィーン、カッセルへ移住、スイス在住）

ポーランド人：Radek Knapp（一九六四年ワルシャワ生まれ、七六年ウィーンへ移住）

チェコ人：Libuše Moníková（一九四五年プラハ生まれ、七一年ドイツ移住、九八年ベルリン没）Otta Filip（一九三〇年オストラウ生まれ、一九六〇年ドイツ移住）

旧ユーゴスラヴィア（クロアチア語）**人**：Marica Bodrozic（一九七三年ダルマチア地方生まれ、八三年両親とともにベルリン移住）

ブルガリア人：Dimitré Dinev（一九六八年プロウディウ生まれ、九〇年ウィーンに移住）Ilija Trojanow（一九六五年ソフィア生まれ、八五年ミュンヘン移住）

ルーマニア人：Catalin Dorian Florescu（一九六七年ティミソアラ生まれ、八二年スイス移住）

スロヴァキア人：Ilma Rakusa（一九四六年リマヴスカ生まれ、五一年スイス移住）

イタリア人：Franco Biondi（一九四七年イタリア生まれ、六五年ドイツ移住）Gino Chiellilino（一九四六年イタリア生まれ、七〇年ドイツ移住）

エジプト人：Asfa-Wossen Asserate（一九四八年アディスアベバ生まれ、ドイツ学校に通い、七四年ドイツ移住）

日本人：多和田葉子（一九六〇年東京生まれ、八二年ドイツ移住）

トルコ人作家たち

フエリドゥン・ツァイモグル

エミーネ・エツダマー

アラス・エレン

ツェーラ・ツイラク

アイゼル・エツァキン